

昭和60年度

大分県内遺跡詳細分布調査概報5

八面山東部地区

深野遺跡

竜頭古墳

高添遺跡

小田遺跡群

1986年3月

大分県教育委員会

例 言

- 1 本書は、大分県教育委員会が、昭和60年度国庫補助金を得て実施した農業関係開発事業に伴う、事前の分布及び試掘調査の調査概要である。
- 2 分布調査、試掘調査にあたっては、県農政部、各市町村教育委員会の協力を得た。
- 3 調査の組織と構成は次のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査指導 橋 昌 信（別府大学教授）

調査員 後 藤 宗 俊（県文化課文化財専門員）

渋谷 忠 章（同主査）

坂 本 嘉 弘（同主任）深野遺跡・高添遺跡担当

牧 尾 義 則（ ” ）

栗 田 勝 弘（ ” ）

高 橋 信 武（ ” ）

小 林 昭 彦（同主事）竜頭古墳・八面山東部地区担当

小 柳 和 宏（ ” ）

田 中 裕 介（同囑託）小田遺跡群担当

また試掘調査にあたっては、三重町教育委員会、千歳村教育委員会、山香町教育委員会、玖珠町教育委員会、三光村教育委員会の協力を得た。

- 4 本書の執筆は、各遺跡の調査担当者がそれぞれ分担し、編集は渋谷があたった。
- 5 製図、トレースは各担当者の他に、姫野和子、渡辺広美、中村公子があたった。

目 次

I	調査及び協議の経過	1
II	調査の概要	7
III	試掘調査の概要	9
	1 八面山東部地区（三光村）	9
	2 深野遺跡（三重町）	12
	3 竜頭古墳（山香町）	18
	4 高添遺跡（千歳村）	27
	5 小田遺跡群（玖珠町）	33
IV	まとめ	40

I 調査及び協議の経過

農業関係開発事業に伴う埋蔵文化財の取り扱い、大分県に限らず各県とも受益者との関係、事前協議の問題、工期の問題、補償費の問題など多くの難問を背負っている。

本県では、昭和40年代の後半から、県北の宇佐地区や、西南部の大野川上中流域で大規模な基盤整備事業が進められたがこの両地域は共に「遺跡の宝庫」とされる地域であるため、大分県教育委員会では関係市町村教育委員会と協力し、重点的に当該地域の埋蔵文化財の調査と保護をすすめ、そのための体制強化につとめて来たところであった。

その後、この関係の開発事業は、上記両地域を含めて県下全域に及ぶようになり、工事面積の増加と共に、これまで予想されなかった地域でも大規模な遺跡が相つき発見されるようになった。この事態に対応するためには、県下全域における工事計画を具体的に把握し、工事にさきだつての地区の詳細な遺跡分布調査を行うことが必要となった。

大分県内遺跡詳細分布調査は、こうした経緯をもって昭和56年度より実施されているものである。調査は農業関係を中心とした開発予定地内の遺跡分布調査、遺構確認調査を二本の柱としている。そしてこれによって得た資料は、各関係者との遺跡保存のための協議資料となり、これまでも多くの遺跡が現状保存になるなどの成果を得ている。

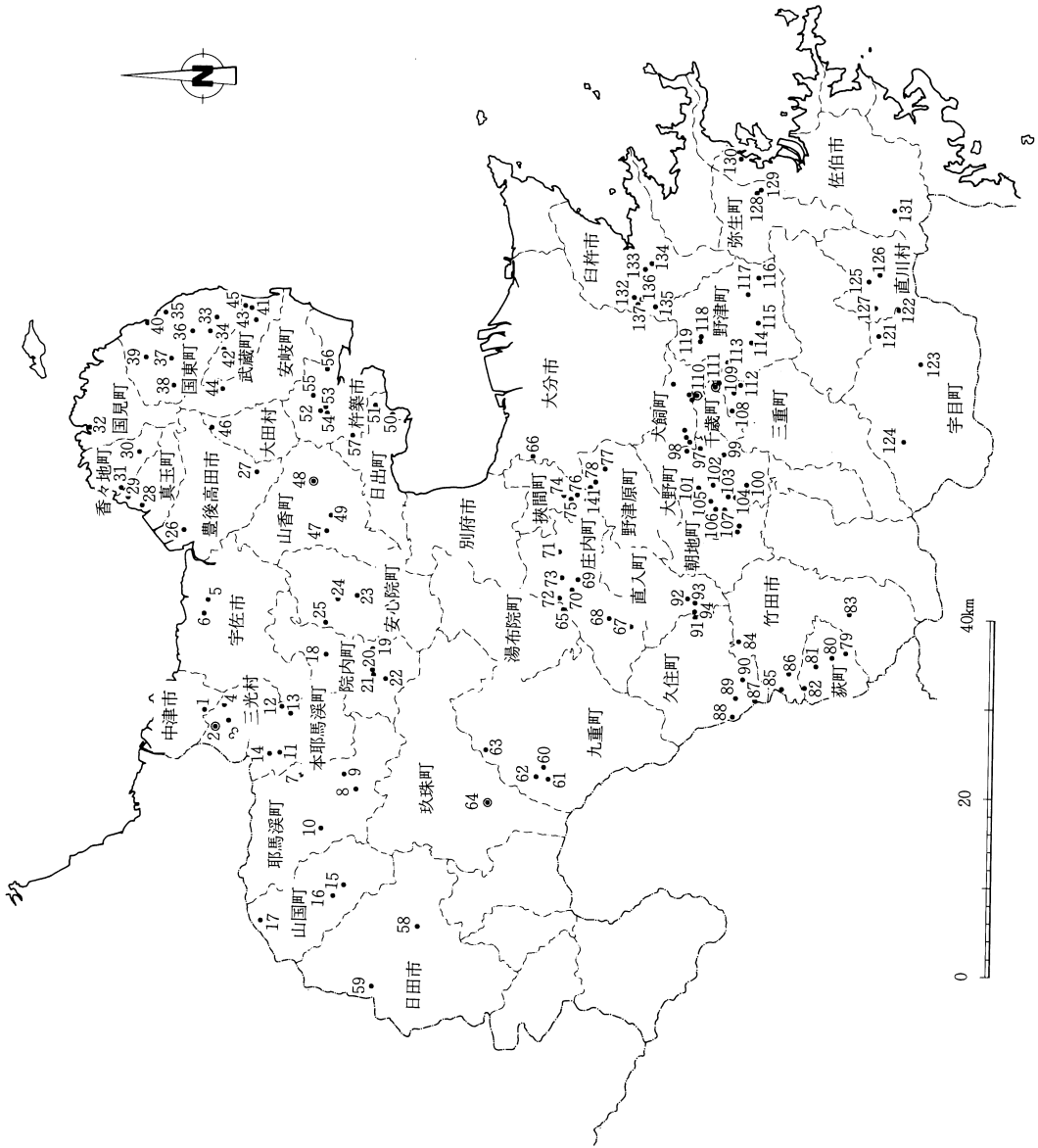
昭和60年度の農業関係開発予定地は、前年度末～今年度当初に県及び市町村農政担当部局より提示され、44市町村、144ヶ所に及ぶ。(表1)

遺跡分布調査は、ここに提示された地区について4月末～6月にかけて踏査し、特に問題のある場合は地元教育委員会だけでなく、農政担当部局を含めた三者で現地協議を行っている。

そしてこの結果は、(1)工区内に埋蔵文化財包蔵地として周知された遺跡が所在し、工法変更等による保存を行うか、事前の発掘調査を必要とする工区。(2)分布調査により遺物が発見され、新たに遺跡の所在が確認された工区。(3)遺物等の発見はなかったが、周辺遺跡の分布状況や地形的な立地条件等から、工事中に新たな遺跡の発見される可能性が強い工区。(4)特に問題のない工区、に分けられ、県農政部へ通知すると共に、問題のある工区については今後の取り扱いについて再度三者で協議を行った。

この結果、三光村八面山東部工区、三重町前平工区、山香町山香第一工区、千歳村高添工区、玖珠町小田工区については、県教委が遺構確認のための試掘調査を実施することになり、こうした地区については、調査結果を基に開発と文化財保護の調整を計るための協議を行っている。

そしてこの協議によって、一部は工法変更等による現状保存や工事地区除外になる場合もあるが、工法変更の不可能な遺跡については、市町村教委が事業主体となって記録保存のための発掘調査を実施している。



第1図 昭和60年度県内遺跡詳細分布図及び試掘調査位置図

昭和60年度農業関係開発事業に伴う遺跡分布調査地区一覧表

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
1	中津市	洞ノ上	6.2	団体営
2	三光村	八面山東部	20	県圃
3	三光村	八面山中部	15	〃
4	三光村	西秣地区	5	パイロット
5	宇佐市	高森地区・原地区		大幹線東西線
6	宇佐市	畑田地区	54	県圃
7	耶馬溪町	木の子工区	5	〃
8	耶馬溪町	下百谷工区	3.8	団体営
9	耶馬溪町	持田工区	5.7	県圃
10	耶馬溪町	樋山路工区	5.2	団体営
11	本耶馬溪町	新田地区	10.2	県圃
12	本耶馬溪町	鱒川内工区	2.9	団体営
13	本耶馬溪町	谷ノ前工区	7.6	〃
14	本耶馬溪町	門前工区	2	県圃
15	山国町	掘江地区	3.5	〃
16	山国町	吉野工区	3.5	〃
17	山国町	毛谷村地区		農道
18	院内町	小稲地区	1	水田利用再編対策
19	院内町	下余地区	3.1	県圃
20	院内町	十ヶ平地区	4.5	新農業構造改善
21	院内町	上恵良2工区	5.4	県圃
22	院内町	上恵良1工区	4.8	〃
23	安心院町	松木換地2工区	5	〃
24	安心院町	大口田地区	4.7	〃
25	安心院町	新貝川工区	10	〃
26	豊後高田市	並石第3換地	11	〃
27	豊後高田市	真中工区	9	〃
28	真玉町	真玉地区	7	〃
29	真玉町	白野工区	3	団体営
30	香々地町	長小野地区	7	県圃
31	香々地町	堅来工区	3	団体営
32	国見町	竹田津干拓工区	11	〃
33	国東町	国東南部Ⅱ区	6	県圃
34	国東町	国東南部Ⅰ区	6	〃
35	国東町	富来南部	0.9	〃
36	国東町	城川		モデル事業
37	国東町	下城仏	4.6	団体営
38	国東町	成仏	1.2	〃

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
39	国東町	富来(畑)	3.1	県圃
40	国東町	富来(塩屋)	4	〃
41	武蔵町	内田地区	7	〃
42	武蔵町	狭間地区	2	〃
43	武蔵町	手野・成吉地区	21	〃
44	安岐町	両子地区	13	〃
45	武蔵町	武蔵東部池ノ内	3	〃
46	大田村	大田村第一工区	4	〃
47	山香町	平ヶ倉工区	5	〃
48	山香町	山香第一工区	10	〃
49	山香町	山香第二工区	10	〃
50	日出町	五反田工区	6.2	〃
51	日出町	真那井工区	7.7	〃
52	杵築市	轟工区	3	〃
53	杵築市	迫地区	1.5	〃
54	杵築市	石山地区	2.5	〃
55	杵築市	大鴨川地区	11.4	新農業構造改善
56	杵築市	守江山中地区	4	小規模模
57	杵築市	鹿倉西地区	4	モデル事業
58	日田市	諸留工区	2.5	団体営
59	日田市	柳瀬地区	1	新農業構造改善
60	九重町	川西一地区	3.8	地域処点整備
61	九重町	相挾間地区	5.7	小規模排水対策
62	九重町	木納水地区	12.3	団体営
63	九重町	下宝工区	7.1	小規模排水対策
64	玖珠町	小田工区	35	県圃
65	湯布院町	小平地区	2.1	〃
66	大分市	宮苑地区	4	団体営
67	庄内町	伊小野一工区	4	県圃
68	庄内町	井手下一工区	2	〃
69	庄内町	中渚五工区	6	〃
70	庄内町	上渚三工区	4.2	〃
71	庄内町	下中尾団地	6.4	農村基盤総合整備
72	庄内町	みの草団地	4.5	〃
73	庄内町	雲取団地	6.6	〃
74	挾間町	東ノ山団地		県圃
75	挾間町	田ノ口団地		〃
76	挾間町	洒野団地		〃

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
77	野津原町	辻原工区	13	県圃
78	野津原町	矢貫団地	20	農村基盤総合整備
79	荻町	柏原第2地区田代工区	13	県圃
80	荻町	柏原地区北原工区	9	〃
81	荻町	荻地区寺ノ前工区	5	〃
82	荻町	山室工区	2	畑総
83	竹田市	宮砥地区		県圃
84	竹田市	鉢山工区		〃
85	竹田市	池部工区	8	畑総
86	竹田市	今工区	0.15	〃
87	久住町	添ヶ津留工区	3	〃
88	久住町	後山工区	3	県圃
89	久住町	添ヶ迫工区		〃
90	久住町	神馬工区	2.5	団体営
91	久住町	柏木工区	2	県圃
92	直入町	長湯日向塚	3	〃
93	直入町	長湯筒井	1.7	〃
94	直入町	長湯長野	3	〃
95	朝地町	田村地区	13	〃
96	朝地町	高尾田地区	7	地区再編
97	大野町	小切畑地区	5.2	県圃
98	大野町	河面地区	7.2	〃
99	大野町	中ノ道地区	0.9	区画整理
100	大野町	中原地区	9	〃
101	大野町	十時地区	3	県圃
102	大野町	大溝地区	0.7	〃
103	大野町	大原地区	0.9	区画整理
104	大野町	郡山地区	2	〃
105	大野町	田中地区	2	〃
106	大野町	酒井寺地区	6.2	県圃
107	大野町	桑原地区	7.3	区画整理
108	三重町	森迫2地区	1.2	県圃
109	三重町	浅水2・3地区	3.4	〃
110	三重町	前平地区	1.5	〃
111	三重町	宮野1地区	5.1	〃
112	三重町	宮野2地区	2.7	〃
113	野津町	長小野工区	4.8	〃
114	野津町	奥畑1～5工区	11.2	〃

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
115	野津町	岩屋1～4工区	12	県圃
116	野津町	遠久原工区	3.4	〃
117	野津町	泊工区	3.8	〃
118	野津町	下藤工区	4.8	〃
119	野津町	広原工区	5.2	〃
120	千歳村	高添工区	4	〃
121	宇目町	河内工区	15.2	〃
122	宇目町	大原工区	7.2	小規模
123	宇目町	小野工区	4.8	新農業構造改善
124	宇目町	田原工区	9	県圃
125	直川村	第3工区	7.7	団体営
126	直川村	細川内工区	3.8	山村新災対策
127	直川村	直川2工区	6	県圃
128	弥生町	荒内工区	5	〃
129	弥生町	一ノ瀬地区	3	団体営
130	佐伯市	狩生工区	9.7	小規模
131	佐伯市	黒沢地区	3	土地改良総合整備
132	臼杵市	王座工区	4.6	県圃
133	臼杵市	荒田工区	11.6	モデル事業
134	臼杵市	望月工区	7.6	団体営
135	臼杵市	広原工区	2.5	畑総
136	臼杵市	岩屋川工区	1	〃
137	臼杵市	吉小野工区	3	〃
138	犬飼町	内川工区	14	〃
139	犬飼町	真萱工区	9	〃
140	犬飼町	栗ヶ畑工区	3	団体営
141	犬飼町	山内工区	2	〃
142	犬飼町	長畑団地	1	〃
143	犬飼町	倉下工区	3	〃
144	野津原町	諏訪北団地	2.5	農業基盤総合整備

II 調査の概要

(1) 分布調査

分布調査は、期間を1次と2次に分け、開発予定地内の現状、地理的条件及び歴史的環境、遺物の散布状況を中心に行った。2次調査は、1次調査によって立ち合い等を必要とする地区を中心にし、工事が実際に着工される11月以降を主として行った。

その結果、遺跡及び遺跡の存在が推定された工区の概要は次のとおりである。

番号	市町村名	工区名	遺跡名	概要	備考
48	山香町	山香第一工区	竜頭古墳	八坂川流域の沖積地。2基の横穴式石室露出。野原石塚墳として周知。	県教委試掘 P18～P26
80	荻町	北原工区	北原遺跡	柏原台地に位置し、一部は試掘済み。縄文晩期遺物包含層、弥生中期・後期集落跡。	工期変更
85	竹田市	池部工区	池部遺跡	池部台地に位置し、一部は調査中。縄文晩期遺物包含層・弥生後期集落跡。	工期変更 竹田市教委調査
86	竹田市	今工区	今遺跡	菅生台地に位置し。周辺にはネギノ遺跡、ヤトコロ遺跡など大規模な遺跡が多い。弥生後期～古墳時代集落跡。	工期変更 竹田市教委調査
120	千歳村	高添地区	高添遺跡	茜川と柴北川に挟まれた合地上。旧石器のほか縄文後期、弥生土器散布。大規模な弥生集落跡の可能性あり。	県教委試掘 P27～P32
138	犬飼町	内川工区	上津尾遺跡	大野川西岸、標高106mの合地上。弥生後期の規模な集落跡の可能性あり。	工期変更
139	犬飼町	真萱工区	真萱遺跡	柴北川北岸、標高100mの平坦台地。弥生後期を主体とした土器片多数散布。	工期変更
27	豊後高田市	真中工区	上野遺跡	桂川上流域の沖積地。条里遺跡として周知されているが、前年度までの調査で、縄文後期、弥生終末の住居跡検出。	豊後高田市教委調査
5	宇佐市	大幹線農道 東西線	高森城跡	高森城跡は中世城跡を主とし、弥生時代の墓地群。原地区は低合地上にあり、弥生土器片散布、墓地の可能性あり。	高森城跡は宇佐市教委調査。原地区は工期変更
6	宇佐市	畑田工区		駅館川左岸の沖積地。土器片が広範囲に点在するが、性格については不明。	工期変更
2	三光村	八面山 東部工区		犬丸川と西秣川に挟まれた微高地。弥生～中世の土器片散布。	県教委試掘 P9～P11
64	玖珠町	小田工区	小田遺跡群	伐株山西方の河岸段丘上にあり、弥生・中世土器散布。石棺の出土も伝えられる。	県教委試掘後玖珠町教委発掘調査 P33～P39
79	荻町	柏原第2工区	田代遺跡	柏原台地。田代遺跡の東端にあたり、遺跡の延長線上にある。弥生時代集落跡と推定される。	工期変更
81	荻町	寺ノ前工区	馬場遺跡	荻合地上にあり、周辺に寺ノ前遺跡等が存在する。一部は調査で弥生後期集落跡検出。	一部荻町教委調査 他は工期変更
110	三重町	前平工区	深野遺跡	大野川流域河岸段丘。遺跡の規模は大きくないが旧石器散布。	県教委試掘 P12～P17

番 号	市町村名	工 区 名	遺 跡 名	概 要	備 考
93	直 入 町	筒 井 工 区		芹川支流の低台地。弥生後期土器片散布。	
95	朝 地 町	田 村 工 区	谷シゲツキ遺跡 不動院遺跡 津留遺跡	市万田川流域の河岸段丘。縄文早期・後期中世土器散布、縄文早期・晩期の田村遺跡は地区除外。	朝地町教委試掘
58	日 田 市	諸 留 工 区		有田川流域の沖積地。弥生中期～後期土器散布。	日田市教委試掘
3	三 光 村	八 面 山 中 部 工 区		犬丸川流域の微高地。遺物は確認されなかったが、周辺丘陵上に弥生～古墳時代の遺跡分布。	工事立合い
11	本耶馬溪町	新 田 工 区		羅漢寺入口の広い沖積地で、一部自然提防。土器片若干散布。	工期変更
25	安 心 院 町	新 見 川 工 区		新見川右岸の低段丘及び沖積地。遺物の確認はないが、周辺に古墳群分布。	工事立合い
26	豊後高田市	並石第3換地		広瀬川流域の氾濫原。遺物の確認はないが周辺に古墳群が分布し、当時の住居跡の存在が推定される。	工事立合い
52	杵 築 市	轟 工 区		八坂川北岸沖積地。遺物の確認はないが微高地に遺跡の存在が推定される。	工事立合い
54	杵 築 市	石 山 工 区		八坂川流域の氾濫原。遺物の確認はないが微高地に遺跡の存在が推定される。	工事立合い
82	荻 町	山 室 工 区		荻台地、現状は山林で伐開後畑地に転用。現状で遺物の確認はないが、周辺に遺跡多い。	荻町教委試掘
44	安 岐 町	両 子 工 区		鱒川流域のやや開けた沖積地。中世以後の水田跡の可能性あり。	
101	大 野 町	十 時 工 区		十時川流域の沖積地及び段丘上。広い平野部をもち遺跡の可能性あり。	工事立合い
115	野 津 町	岩 屋 工 区		野津川流域の氾濫原。遺物の確認はないが自然提防上は遺跡の可能性あり。	工事立合い
121	宇 目 町	河 内 工 区		市園川上流の氾濫原及び段丘上。遺物の確認はないが、段丘上は遺跡の可能性あり。	工事立合い
1	中 津 市	洞ノ上工区		犬丸川流域の沖積地。岩井崎横穴群の北側にあたり古代水田跡の可能性あり。	中津市教委調査
61	九 重 町	相 挾 間 工 区		宝泉寺へ注ぐ小河川流域の低段丘。遺物の確認はないが平担部に遺跡の可能性あり。	工事立合い
66	大 分 市	宮 苑 工 区		賀来川北岸の低段丘。千代丸古墳に接し前年度工区で歴史時代の遺構を検出。	大分市教委調査
90	久 住 町	神 馬 工 区		久住川流域の低台地。やや広い平担地をなし弥生～古墳時代の集落跡の可能性あり。	工期変更
129	弥 生 町	一ノ瀬工区		床木川左岸の氾濫原。やや広い平坦部をもち中世以降の遺跡の可能性あり。	
130	佐 伯 市	狩 生 工 区		佐伯湾に面した後背湿地帯。微高地は中世以降遺跡の可能性あり。	

Ⅲ 試掘調査の概要

1. 八面山東部地区（三光村）

1 位置と環境

八面山東部地区は、下毛郡三光村大字下秣字築城に所在する。八面山は南部に急峻な深い谷を形成しているが、北半部はこれとは対象的に緩やかな傾斜をもって北の中津平野に裾を広げている。しかも裾部は谷によって広く開析され、樹枝状に伸びる低位丘陵を発達させている。八面山東部は丘陵の裾部付近まで北流し、更に東へ流れを変える犬丸川によって以東の丘陵地帯と区別される。八面山東部地区として調査を実施した範囲は、犬丸川によって形成された平野部の八面山寄りの部分にあたる。

周辺部の遺跡としては、南東約2kmの西向き斜面上にズリヤネ城が位置する。今年度調査が実施され、15世紀末～16世紀代の遺物及び遺構が検出されている。又、北西約2kmの中津平野を臨む丘陵先端部に岡崎遺跡が所在する。多数の石蓋土塚を主体とする墓地として知られている。弥生時代後期～古墳時代の所産とされる。調査地区近辺では、現在まで他の遺跡はあまり確認されていない。



第2図 八面山東部地区位置図

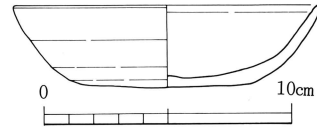
2 調査の概要

調査は、県営圃場整備事業（八面山東部地区）の事前調査を実施したものである。調査対象地は、工事によって削平予定の西側微高地約20,000㎡とした。調査の方法は調査地区を北・南・東の3地区に区分し、トレンチ及びグリッドを用い遺構の存否確認を行なった。

北地区では、グリッド16、トレンチは東西方向に長さ20m～50m、巾1mを7本設定した。南地区では、グリッド9、トレンチを東西方向に長さ10m～40m、巾1mを7本、南北方向に30m～40m、巾1mを24本設定した。東地区においても同様の方法で、巾1mのトレンチを南北方向に3本、東西方向に1本設定して遺構の確認を行った。

試掘の結果、当該地区全体に稀薄ではあるが弥生時代～近世に至る土器類の散布が認められた。しかし、ほとんどが耕作土中より採集した細片であった。又、遺構は確認されず遺跡として認定する積極的根拠を欠くものと判断した。

図示した遺物は北地区より出土した土師器坏形土器である。口径12.4cm、器高3.3cm、底径6.8cmを計測する。底部はヘラ切り後ナデを施し、体部下端にはヘラによる整形痕が認められる。10世紀代の製作と思われる。



第3図 北地区出土土器実測図



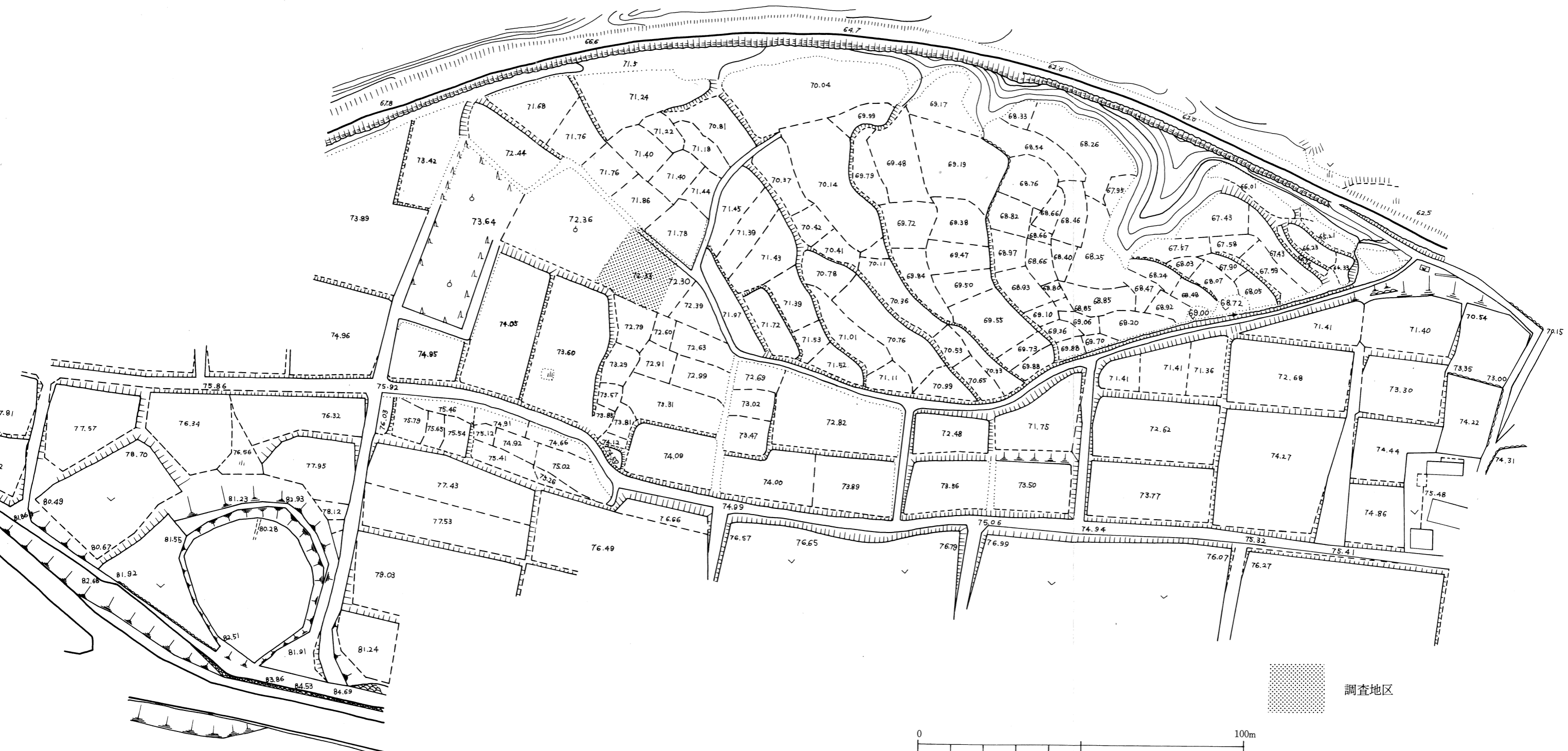
第4図 八面山東部地区グリッド・トレンチ配置図



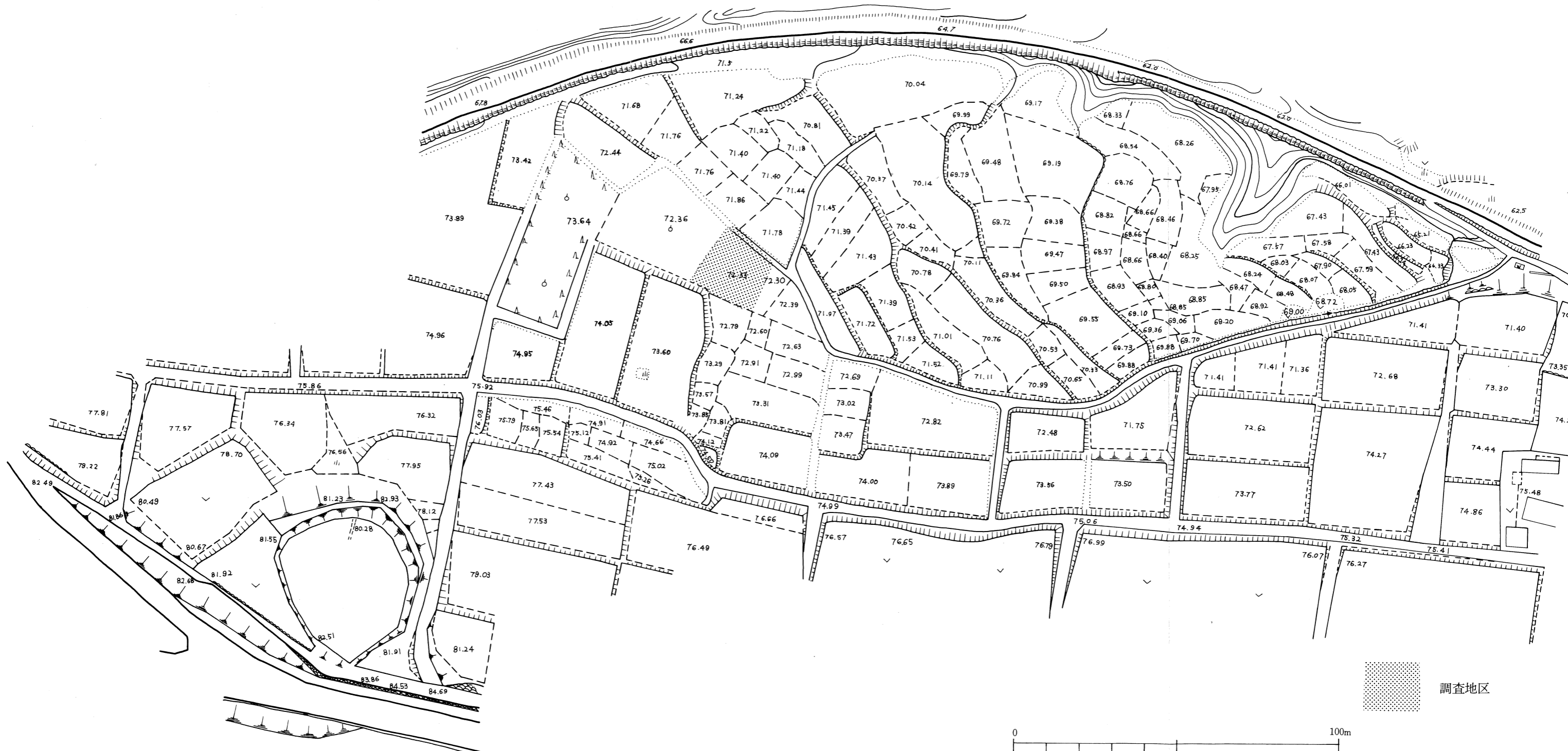
北地区グリッド発掘状況



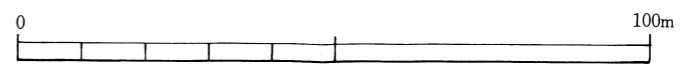
南地区トレンチ発掘状況



第6図 三重町深野遺跡周辺地形図



調査地区



第6図 三重町深野遺跡周辺地形図

瀬遺跡がある。さらに上流には旧石器時代の百枝遺跡がある。

2 調査の概要

(1) 調査の経過

深野遺跡は昭和59年度詳細分布調査の第1次調査で5月に現地を訪れた。この地区は今年度の県営圃場整備事業予定地区であり、八月頃の着工予定であった。地形は大野川に突き出た台地状であり、遺跡がある可能性が強いため、工事に先立ち試掘調査の必要があることを農政部に対して通知し、八月に試掘調査をした結果、旧石器時代の包含層があることが確認された。

(2) 土 層

遺跡は斜面でしかも水田化しているため、侵食や削平がくり返えされたようで、表土である耕作土の下に盛土部が約50cmあり、その直下がすぐ遺物包含層となっている。この層は赤茶色で粘質が強く、乾燥すると硬くなる。

しかし堆積は薄く、約20cmで次の層の凝灰岩の風化土層があらわれる。この層は遺物包含層に比較すると黄味をおび、凝灰岩の小礫を多く含む。遺物は含まれておらず、調査はこの層の上面で終了した。

(3) 遺物の出土状況

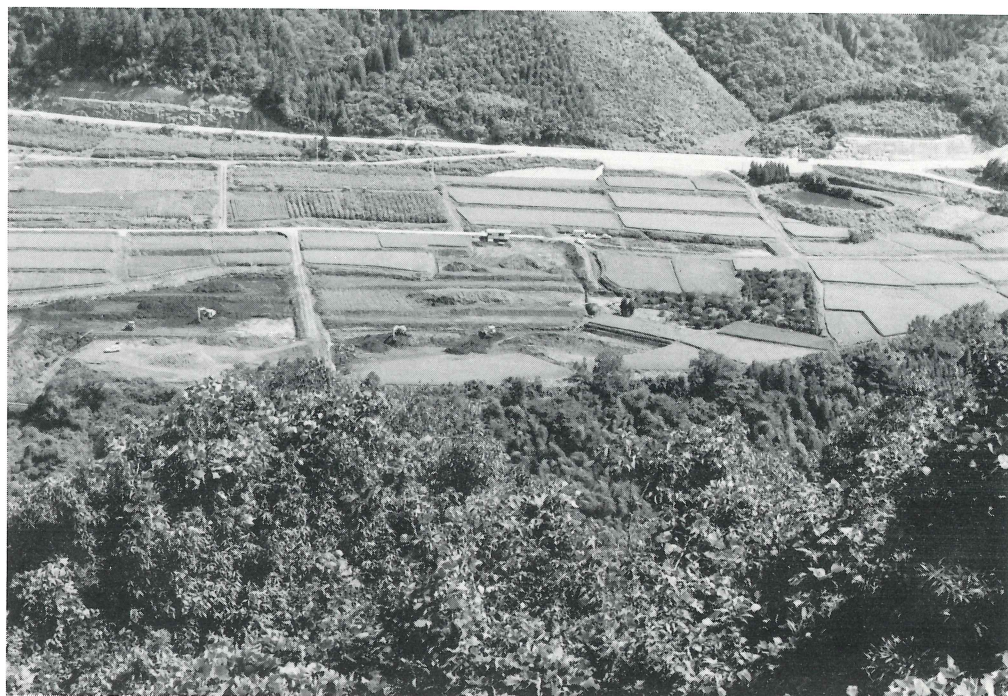
試掘調査の結果、遺物は工事施行区の西端でまとまって出土した。そこで、ここに調査区を設定し掘り下げを行った。微地形をみれば、東側のくぼ地にむかう緩やかな斜面になる。そのため遺物は西側の地区除外となった畑地周辺に多く出土し、包含層はこの方向に向っているようである。これに対し東側は遺物も少なく、しかも土器が混入する攪乱状態であった。

(4) 出土遺物

遺跡は旧石器時代であるため遺物は石器が主体を占め、土器は攪乱部からわずかに出土したにとどまる。

石器は試掘調査の際、フォルンフェルス製の剥片尖頭器が1点出土しているのみで、他は剥片である。その剥片は2種類の石材が使用されている。第1はフォルンフェルスで22点が出土したが、3分の1は自然面を残す剥片で残りは3cm以下の小さな剥片である。一方安山岩の石材は25点が出土しており、破片は全て大形で、同一母岩から剥がされたものである。パテナの進行は認められない。このため接合が可能である。層位的には三重町上下田遺跡に近いが、欠落する層が不明であり、対比は困難である。この他、多数の礫が出土しており、その中には焼石や石器製作の母岩となるものも含まれる。

土器は、縄文晩期末の刻み目突帯文土器である。口縁部の破片は外面に一条の刻み目突帯がめぐり、その下に焼成前の穿孔が3ヶ所認められる。また胴部の破片の屈曲部にも太い刻目がみられる。



深野遺跡遠景（白鹿山頂より）



深野遺跡発掘調査風景



深野遺跡遺物出土狀況



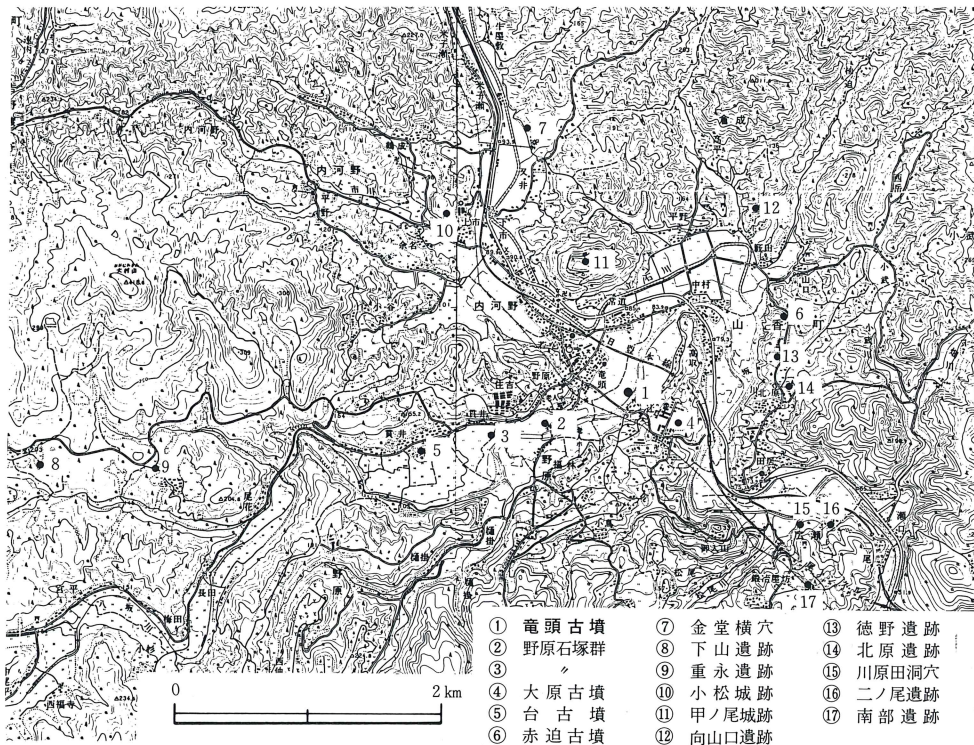
深野遺跡遺物出土狀況近景

3. 竜頭古墳 (山香町)

1 位置と環境

古墳は、速見郡山香町大字野原字竜頭に所在し、野原古墳群として周知されている。周辺の地形は、北西に大村山を中心とする標高200m～400mの山塊があり、谷を隔て北東に田原山などより南へ派生してきた200m～300mの急峻な丘陵が連なる。いっぽう南は北とは対象的に100m～200mの傾斜の緩い台地状の丘陵となる。南北丘陵の間は、東流する八坂川に北流する樋掛川が合流する付近より東西2.5km、南北0.5kmの東西に長い沖積地が形成されている。古墳は、八坂川がこの沖積地東端より更に蛇行を続け、南流する途中に一度大きく北へ湾入する地点の左岸至近地に位置する。

周辺の遺跡分布状況を概観すると、竜頭古墳の所在する平野部、北部の谷、南部の八坂川流域の平野部を臨む丘陵に縄文時代より平安時代に及ぶ遺跡が分布している。特に古墳は八坂川左岸の平野部において上流より、台古墳⑤、野原石塚群①～③が存在し、この平野を南より臨む丘陵上に大原古墳④がかって位置していた。更に、南流する八坂川東部の丘陵には赤迫古墳⑥が位置する。又、北部の谷には金堂横穴4基⑦が所在する。このうち野原石塚群は、全てを石室とは認定できないが、墳丘を欠損した古墳主体部を含んでおり、今回調査を実施した竜頭古墳①はその1つである。



第7図 竜頭古墳位置図及び周辺遺跡分布図

2 調査の概要

調査は、県営圃場整備事業（山香地区）を起因とする事前調査として実施したものである。古墳は、当初2基存在するものと考えられていたが西方部の石組は観察の結果、古墳主体部でないことが判明した。

従って今回の調査は古墳1基を対象とした。更にこの古墳が地元関係者の発議により現状保存されることになり、調査は全掘することなく現状で可能な範囲に留めた事を付記しておく。

古墳の埋葬施設は、主軸方位北9度東を指向し南へ開口する横穴式石室であった。遺構の遺存状況は、ほぼ玄室残欠と云うべきものであり、墳丘、石室の天井部、羨道を欠失していた。腰石及び袖石はほぼ原位置で残っており床面も比較的良好な遺存状態を示していた。

玄室は、奥巾2.05m、前巾2.0m、右壁長2.05m、左壁長1.45mを測った。奥壁、左右壁線共に直線的である。壁の構築方法は、奥壁、左右壁共に各2石の大石を用いるものであった。奥壁は、長さ1.15m×奥行0.5m×高さ1.0m以上、長さ1.05m×奥行0.58m×高さ1.0m以上を用い、その上部と内側は平坦に整えられていた。左右壁は、長0.63m～0.97m、奥行0.4m～0.8m、高さは現状でやや傾きのあるものを復元すれば床面よりほぼ1m内外となり奥壁と同様の数値を示し、高さをそろえたものと云える。玄門部には両袖を配して、左右袖巾は各0.5mと測定された。

床面は、調査当初約0.5mの厚さで流入土が堆積しており、かなりの攪乱が予想されたが玄門寄りの0.6m×0.5mの範囲を除き敷石が良好に残っていた。床面の構築方法では、長さ0.3m～0.45m、巾0.25m～0.35m、厚さ10cm内外の扁平な河原石を壁沿いに規則的に配していることが確認でき、床全面に及ぶものと考えられた。この敷石の上部には、更に径0.05m～0.15mの円礫が壁際の敷石を除く部分のほぼ全面を被覆していた。遺物は、左右袖石寄りに提瓶、蓋の須恵器が出土し、鉄器類が奥壁、左壁、左袖石付近より出土した。なお、石室構築石材は、安山岩が利用されていた。



竜頭古墳遠景



第 8 図 竜頭古墳及び周辺地形図

3 出土遺物

遺物は、石室内最下層堆積土中及び敷石上より出土したものが全てである。堆積土中より出土したもので敷石上の遺物と接合するものが多く、その帰属は石室内にはほぼ限定できる。

土器は、須恵器提瓶3個体(1、2、3)坏蓋1点(4)が出土した。これらの須恵器は、ほとんど左右袖部付近に集中しており、提瓶1個体分が左袖に接して出土し、他は右袖付近に散在していた。

鉄製品は、刀子2点(5・6)鉄鏃3点(7、8、9)である。これら刀子は、奥壁右前部より出土し、5は切先を北東へ向け刃は奥壁に向けていた。6は切先が西へ向いた状態であった。鉄鏃は、7が左壁付近にはほぼ壁と平行に北を向いて出土。8は右袖付近より南向きに出土した。又、ガラス小玉13点を堆積土中より検出した。

提瓶(1、2、3)、1は、口径7.6cm、器高18.8cm、体部径15.2cmを測りほぼ完形品である。頸部は外反し、口縁端部は丸味を帯びる。体部前面の張り出しはあまり大きくなく、背面はヘラ削り調整により平坦面を成している。吊り手は緩い鉤状を呈す。体部外面は、カキ目痕を残し、内面は、ロクロ整形と指頭によるナデ調整が見られる。又、口縁部内面には、「III」のヘラ記号が記されている。2は、口径7.6cm、器高18.8cm、体部径15.0cmを測る。体部 $\frac{1}{2}$ を欠失する。頸部は直立気味に立ち上がり口縁端部は、矩形の断面形を示す。吊り手は、小形の鉤状を呈す。体部は、全面をやや粗いカキ目調整を施している。内面にはロクロの整形痕が顕著に残る。3は、頸部より口縁部及び体部の一部を欠失する。体部前部は、ナデによって、背部は、ヘラ削りによってほとんどカキ目痕を残さない。体部径15cmを測る。

提瓶は、3点共に良好な胎土、焼成であり、灰褐色を基調としている。

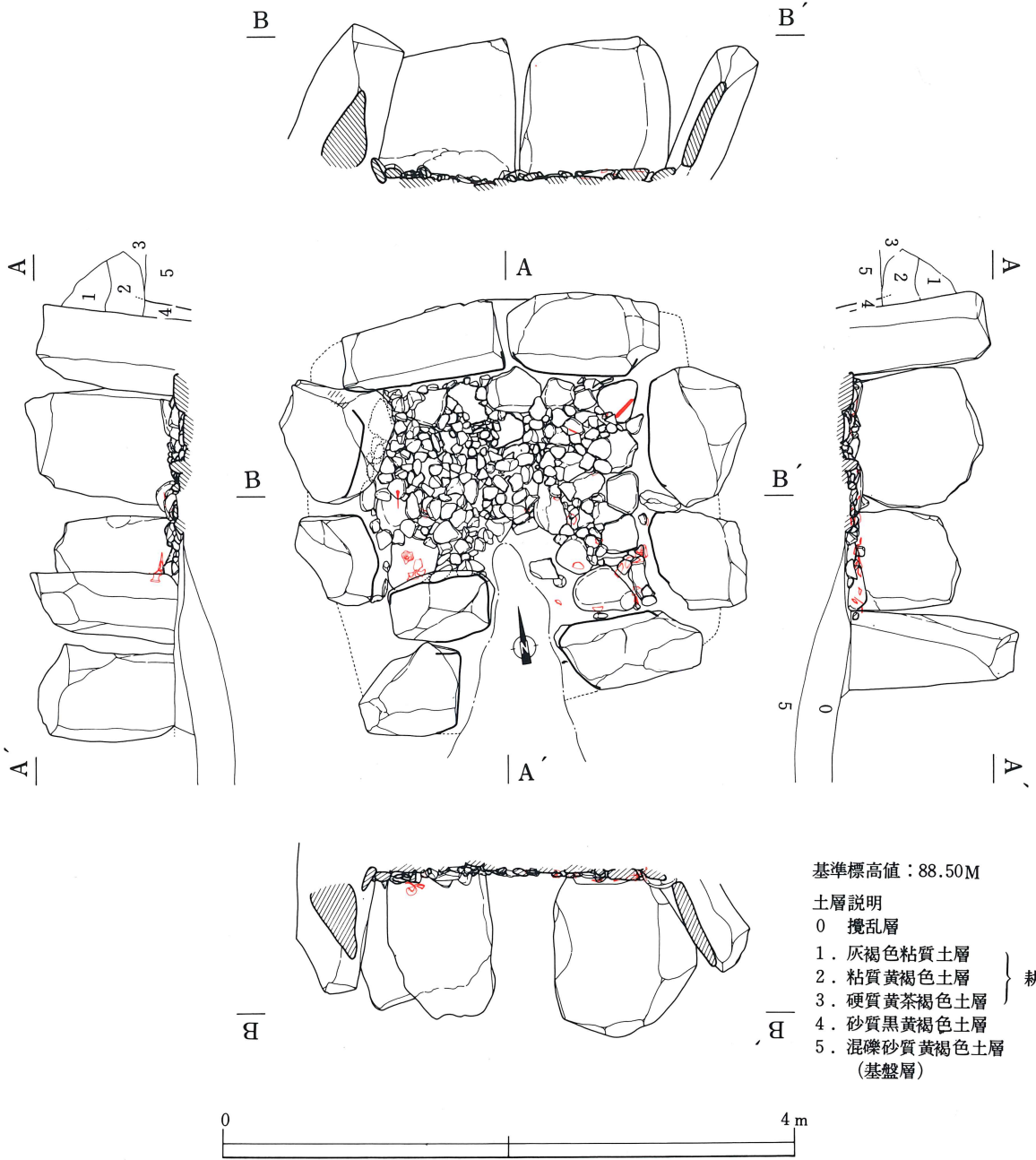
蓋(4)は、口径9.8cm、器高3.5cmを測る完形品である。壺類の蓋と想定される。天井部は丸く、口縁部は端部にてやや外反する。整形技法は天井部外面に右方向回転ヘラ削り調整を施し、口縁部内外面は、横ナデ調整が行なわれ、天井部内面に一方向ナデが施されている。胎土、焼成共に良好で暗灰色を呈す。

刀子(5、6、7)5は、現存長18.5cm現存刃部長17.0cm、巾2.0~2.2cmを測る大形の例である。断面形は、二等辺三角形を呈す。6は、全長10.4cm、刃部長6.4cm、巾は関部にて1.5cm茎長4cmを測る。刃部断面形は、ほぼ二等辺三角形を呈す。刃部先端に向い細くなっており研ぎ減りの状態が観察できる。7は、刀子の茎部残欠である。

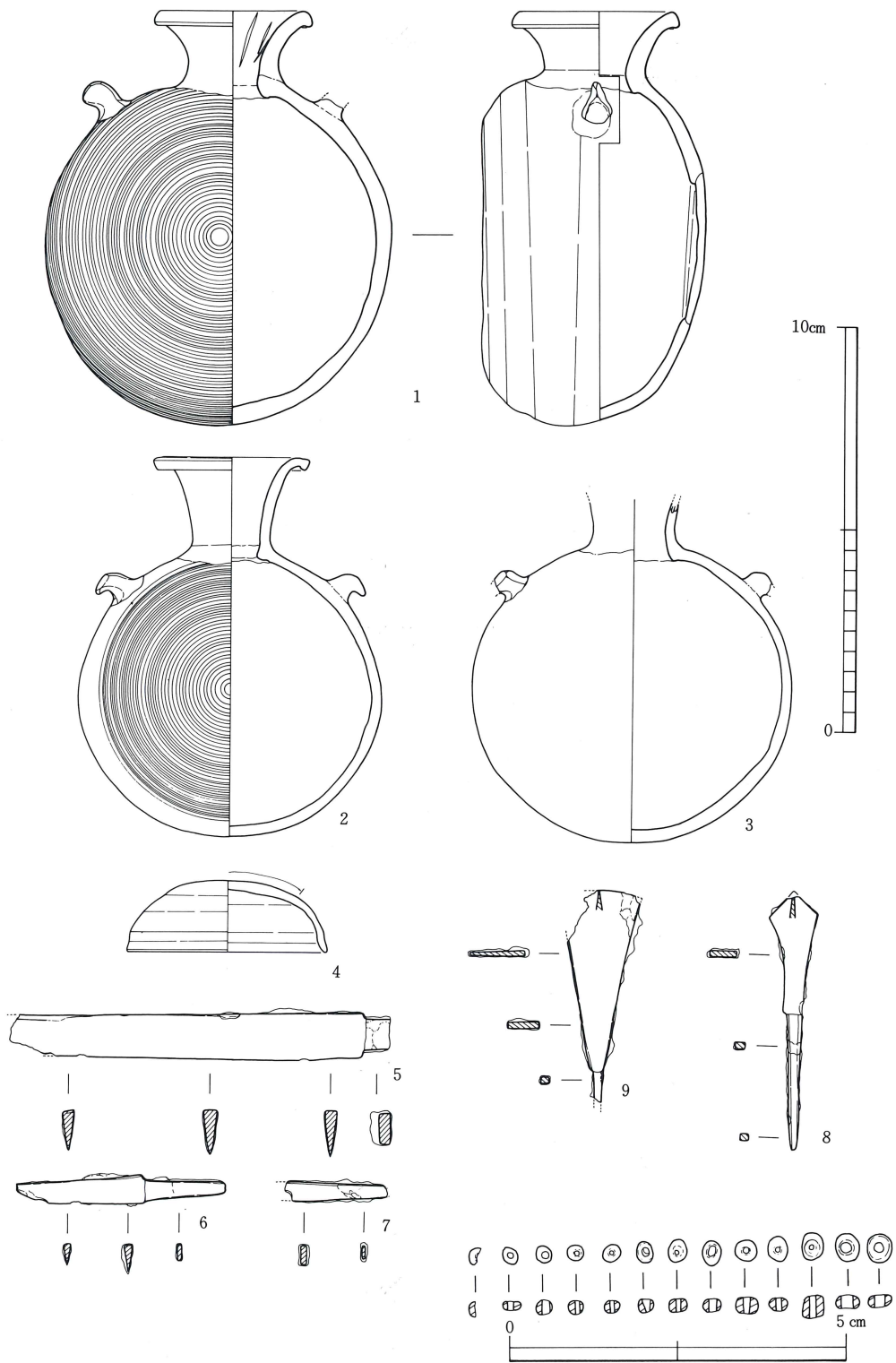
鉄鏃(8、9)8は、圭頭広根斧箭式に属す。身の先端部を若干欠くが現存長12.3cmは実長に近い。身は、2.4cmを測り平造りである。茎は長を6.8cmを測り断面矩形を呈す。9は、方頭広根斧箭式に属す。身の一部を欠失する。現存長10.5cm、身の長さ8.7cm、復元巾4cmを測る。茎は細く径0.4cmを測る。

ガラス小玉(10~22)径2.0mm~4.5mm、厚さ1mm~3mm、孔径0.5mm~1.5mmを測る。色調は、黄色(11、12)、緑色(10、13、14、16、18、19、20)、濃青色(15、17、21、22)を呈す。

竜頭古墳は出土遺物より6世紀後半に比定できる。



第9圖 竜頭古墳石室実測図



第10图 竜頭古噴出土遺物実測図



竜頭古墳調査前全景



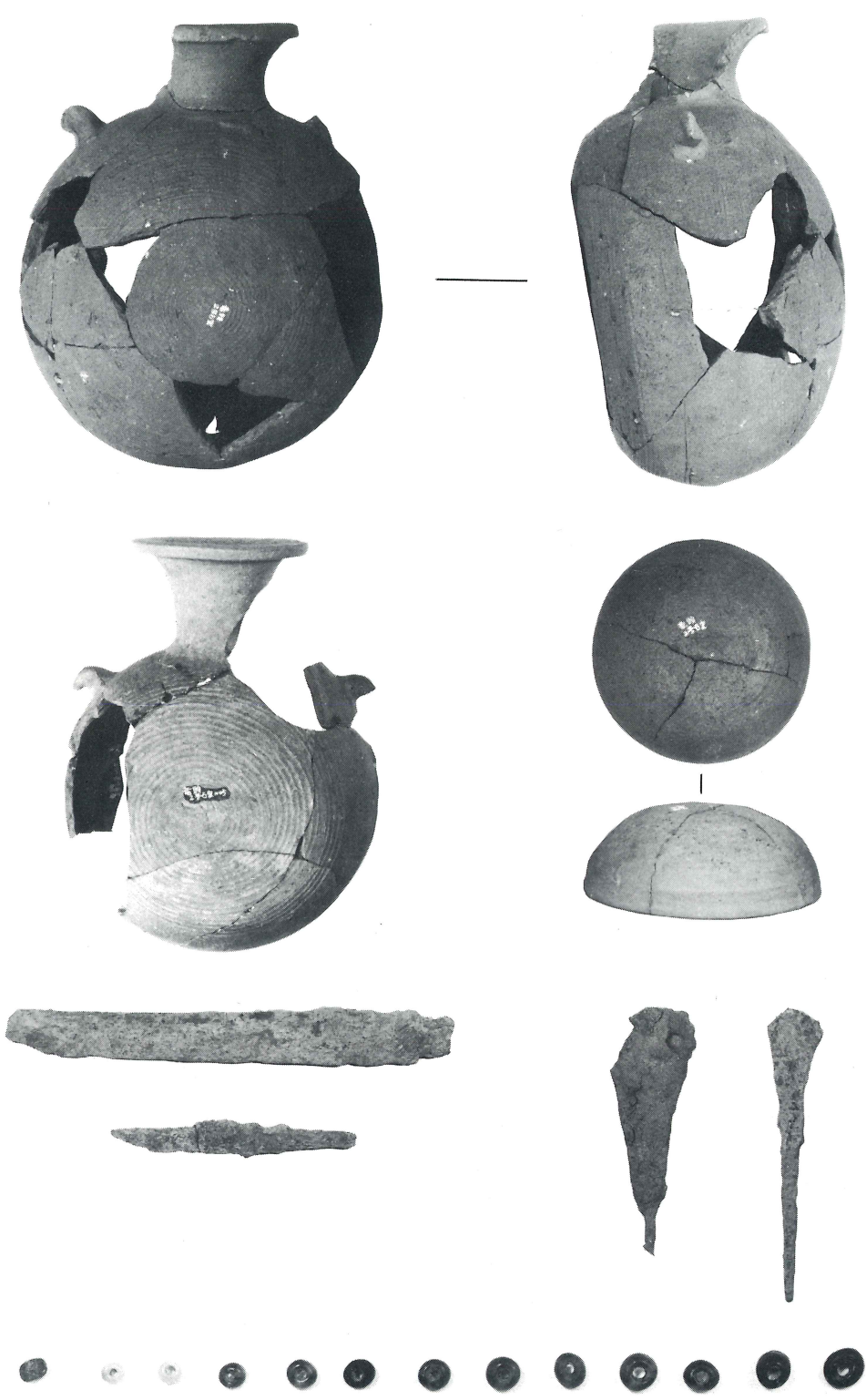
竜頭古墳発掘状況



竜頭古墳石室内敷石検出状況



竜頭古墳石室内遺物出土状況



竜頭古墳出土遺物

4. 高添遺跡 (千歳村)

1 立地と環境

大野郡千歳村は、南の祖母・傾山系と北の九重連山と鎧ヶ岳・御座ヶ岳山系に挟まれた地溝帯を流れる県下最大の流域面積をもつ大野川の中流域に位置する。村内には大野川の支流により分断された、標高130m前後の独立性の強い、凝灰岩を基盤とした火山性台地が展開している。高添遺跡はこうした台地の中のひとつであり、北側を柴北川、南側を茜川に挟まれた、東西に延びる台地で、標高は約100mを測る。台地上には土器や石器などの遺物が広く散布しており、遺跡として古くから周知されていた。

2 調査の概要

調査の経過 高添遺跡のある高添地区は、昭和59年度の県営畑地帯総合土地改良事業の対象地としてあげられ、遺跡の一部が施行されることが決定的となった。そこで、年度頭初、地表面での遺物の広がりや密度を調査した。その結果、今年度の工事施行区域については、



第11図 高添遺跡及び周辺遺跡分布図

遺物は密に散布しないものの、いくつかの土器片が採集された。そこで工事に先き立ち、試掘調査を実施することにした。試掘調査は、昭和60年11月から12月にかけて実施された。その方法は、工事対象地域全体に10m×10mのグリッドを組みその一角の2m×2mを掘り下げることとした。その結果、試掘区は152ヶ所にのぼった。

土層 土層の堆積状況は、大野川中流域の各台地と同様で、第Ⅰ層が黒色火山灰の表土、第Ⅱ層が黒色火山灰土、第Ⅲ層は茶黒色の火山灰土で縄文時代後期の遺物包含層である。第Ⅳ層は黄茶色をしたアカホヤで、第Ⅴ層は黒色をした硬質の火山灰土である。この層は縄文時代早期に比定される。さらに、第Ⅵ層は黄褐色のローム層で上部が軟質で下部は硬質である。このⅥ層は旧石器時代の包含層である。これが高添遺跡の標準層位であるが、試掘地点により欠落や厚さを増す層が認められ、台地上は一様ではない。

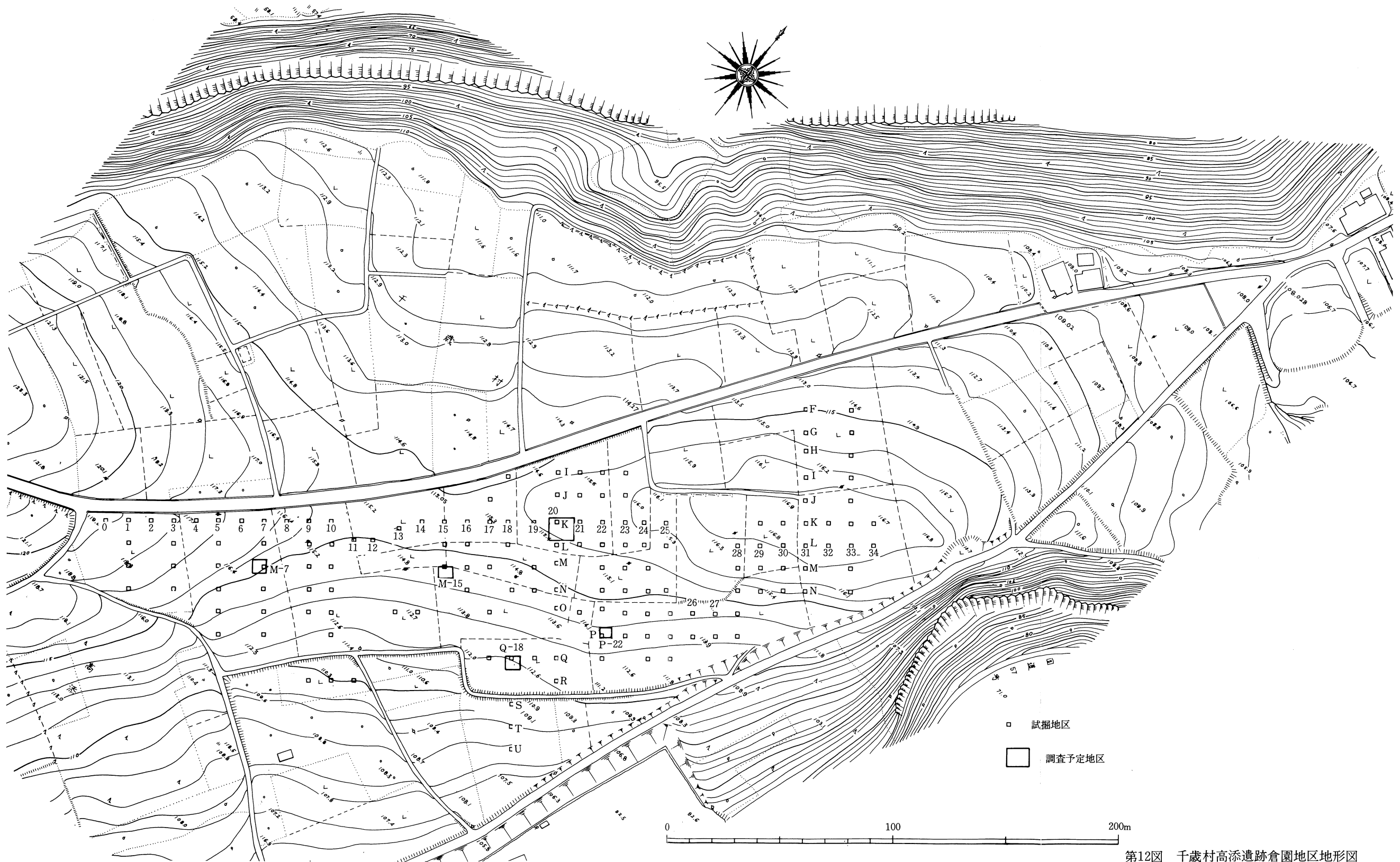
遺物とその出土状況 試掘の結果5ヶ所で遺物の集中地区や遺構を確認した。その内訳はM-7区とP-22区で旧石器時代の遺物集中地区、R-18区で縄文時代後期の遺物包含層、K-20区とM-15区で住居跡と考えられる遺構を確認した。

M-7区とQ-22区の旧石器時代の遺物は第Ⅵ層の上部の軟質ローム層であるが、Q-22区は表土層下に露出するという状況であった。遺物は流紋岩やフォルンフェルスの剥片が主体を占めるが、製品作された石器は検出されなかった。又、これに伴って礫が出土しているが、明らかに熱を受けているものである。

R-18区の一部からは縄文後期中葉の西平式土器の遺物がまとまって出土したが、これは、最近の周辺同時期の遺跡の調査からすると、直径4m前後の集中となり、それは住居跡などの遺構検出のための決め手となりうるもの推測される。また、この時期の遺物の単純なまとまりは、三重町惣田遺跡以外になく重要である。

M-15区、K-20区で検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡と考えられる。千歳村の台地の西側にある同じ大野川中流域の大野原台地からは、弥生時代後期から古墳時代前期の多数の住居跡で構成される集落跡が確認されている。このことから、2つの遺構はこの地区に展開する集落の一部と考えられる。

試掘調査では、以上のことが判明したが、いずれも調査区内で納まるものではなく拡張の必要が生じた。そこで農政当局と協議の結果、この地区については拡張し、調査することとした。なお、千歳村では、これまで水田地区の圃場整備事業が施行されてきたが、それも終了し、今年度から、台地上の畑地に対し、畑地帯総合土地改良事業が開始された。今後とも工事に伴ない、発掘調査が必要となる可能性が生じると思われるが、その保護については、関係当局との十分な協議をしなければならない。



第12図 千歳村高添遺跡倉園地区地形図



高添遺跡遠景（犬飼町食肉センターより）



高添遺跡試掘調査状況



高添遺跡発掘調査風景



高添遺跡円形住居跡

5. 小田遺跡群（玖珠町）

(1) 位置と環境

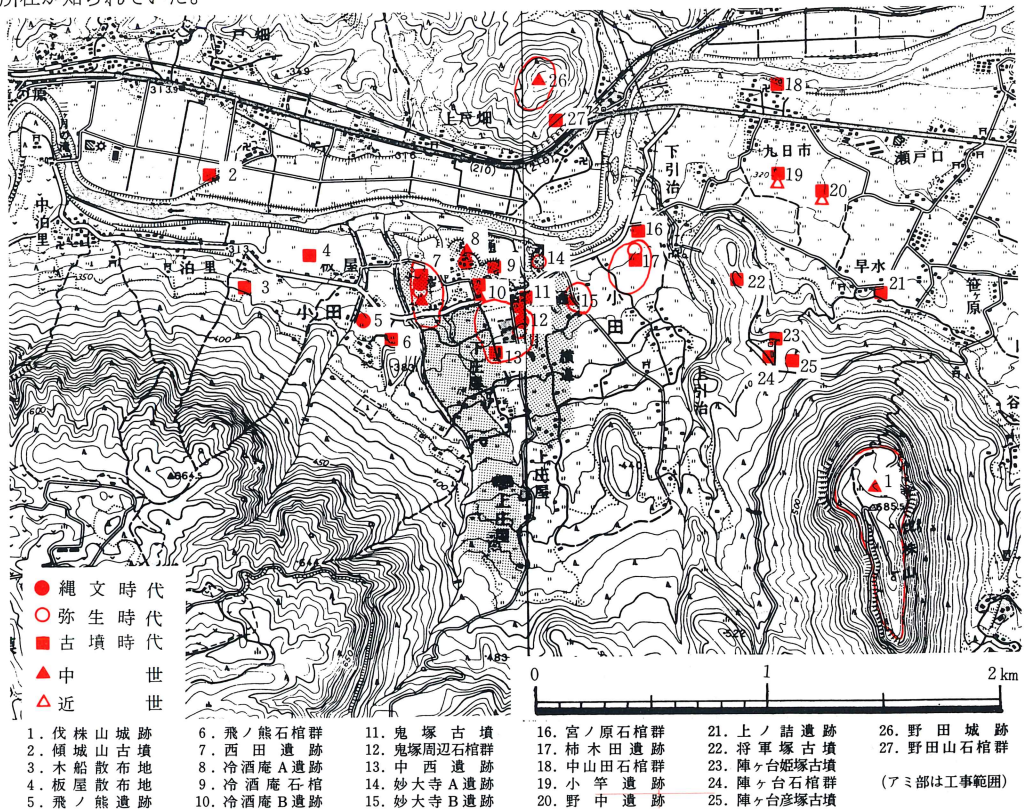
当遺跡群は玖珠郡玖珠町大字小田に所在する。小田地区は玖珠盆地西部に位置し、伐株山西方にゆるやかに下向する扇状地形がその北端で玖珠川に浸蝕切断されて、東は万年山と玖珠川が接近し、西は伐株山、南は万年山でさえぎられ、北は玖珠川の河触涯に落ち、一つの完結した自然的地域をなす。標高310~400mで、川に近づくにつれてゆるやかな平坦地を形成し数条の小河谷によって分割されている。

この地は、鬼塚装飾古墳が所在することで知られるほか、縄文遺跡、石棺群の存在が知られていた。また中世玖珠郡衆の中心的豪族であった小田氏の本貫地であり、近世には天領として

石高一千石をこす小田村となっている、小字名に、冷酒庵、妙大寺、朱善寺、堂処の下等、屋号通称として城、宮田、馬場、タテ等の中世に起源をもつと考えられる地名が多い。

現在は傾斜地を含めてほぼ全耕地が水田化しているが、この景観は近世末期の万年井路開削後のものであり、それ以前は畠地の卓越する景観をなしていたと考えられる。

(註)玖珠町在住の河上清久氏らの調査により、飛の熊縄文土器散布地、宮の原石棺群、鬼塚周辺石棺群の所在が知られていた。



第13図 小田遺跡群及び周辺遺跡分布図

(2) 調査の経過と概要

調査は、昭和60年度県営圃場整備事業に伴う詳細分布調査（試掘調査）として行なわれた。工事対象面積35haに対し調査期間(11月12日～12月13日)が限られていたため、聞きとり、地形観察に基づいて、平坦地、緩傾斜地、伝承地（石棺・寺院等）を選択して、試掘を開始した。試掘はまず水田形状にあわせて任意方向に20m方眼をくみ2×2mグリッドを設定し、遺跡の状況にあわせて10m方眼および、トレンチ調査を併用した。小河谷に狭まれた尾根状平坦面およびその縁辺において次々と遺跡が確認されたが、調査後半には工事と競合することになったため試掘の及ばないままに露出する遺跡もあり、工区南半の傾斜地には調査は及ばなかった。

以下各遺跡毎に概要を記す。

西田遺跡

15-14・15工区に広がり、水田床土直下で遺構検出面となる。15-14と15-15北半では古墳時代後期の住居跡が群在し15-15南半を中心として、中近世の柱穴群が広がる。遺物としては、打製石斧・黒曜石片を含み、縄文時代の遺構の存在も考えられるほか、弥生後期末～古墳時代初頭の甕、高坏、古墳時代後期の土師器・須恵器、中近世の土師器・陶磁器が検出されている。15-13工区はすでに削平をうけていた。

冷酒庵A遺跡

15-10工区を中心に検出された。基本層序はⅠ層（水田床土）、Ⅱ層（黒褐色土）は10～30mの堆積で、Ⅲ層は黄褐色土となり、Ⅱ層中より縄文時代後期三万田式の浅鉢・深鉢を検出しており、遺跡は工区外の畑地・宅地下に広がると考えられる。また中世（16C頃）の土拵墓を一基確認しており、土師器坏が副葬されていた。この中世墓地は台地先端に向かって広がると考えられる。

冷酒庵B遺跡

調査中は、中通C遺跡と仮称した遺跡である。グリッド調査によって古墳時代後期の住居跡2軒と柱穴群を確認に、さらに詳細に遺構の分布をみるため、削平予定地をユンボによって耕作土除去を行い遺構検出作業を行った（第3図）。その結果、古墳時代後期住居跡9基、および



冷酒庵石棺



第14図 地形およびグリッド配置図 (赤線は完成後の圃場および小字堺) ※アミかけは中・近世遺跡

中世（16世紀頃）土壙多数と柱穴群を検出した。15-8工区はすでに削平を受けていた。

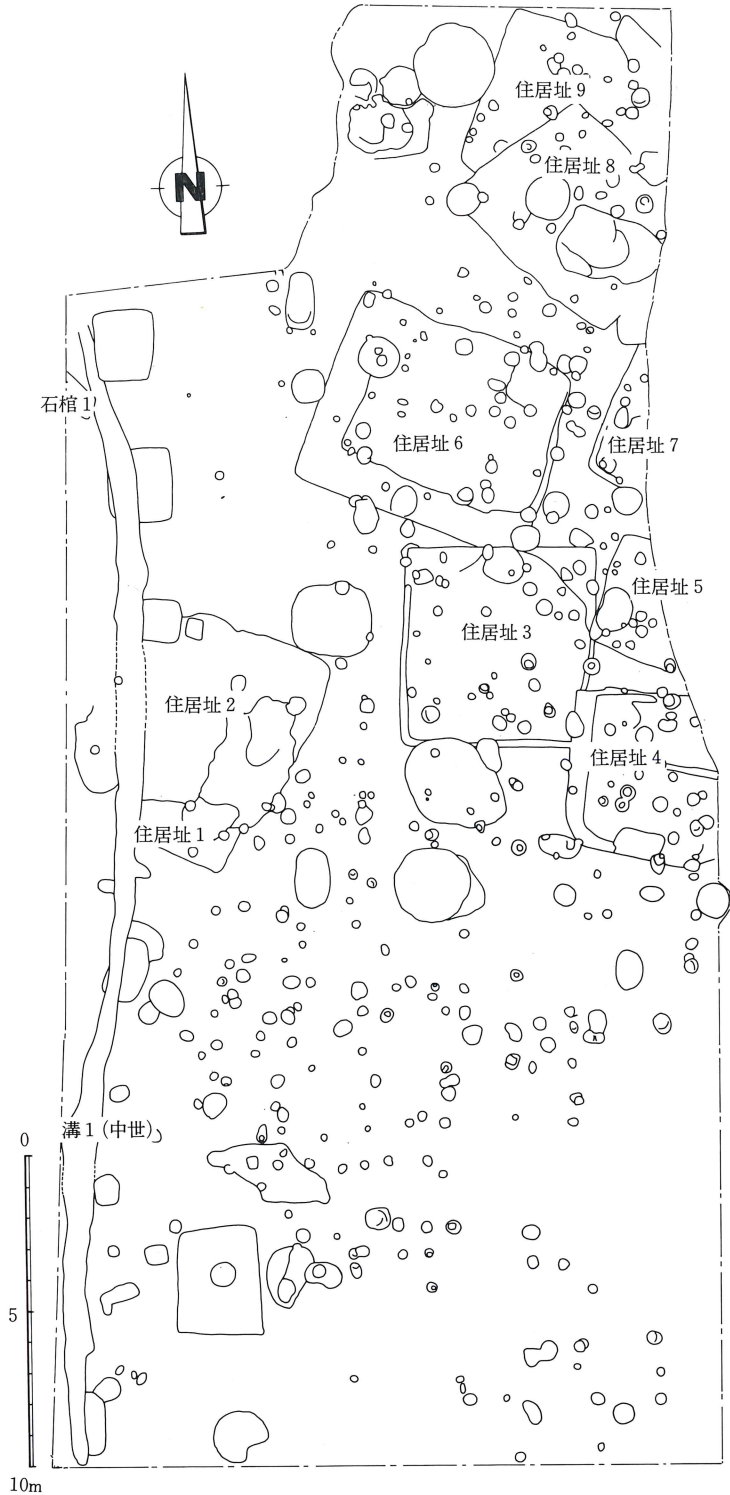
冷酒庵石棺

15-3工区の台地端で検出したもので、蓋石を検出したのみで、盛土保存を行なった。周辺に石棺がなお存在すると推定される。

また、15-3・4・5・6工区付近には中世寺院である導伝寺跡と伝えられ、また近世小田村庄屋敷跡があり、グリット調査を行なったが、すでに削平・改変が著しく遺構の検出はなかった。遺物としては流れこみの状態で、打製石斧・黒曜石片・弥生土器・土師器、青磁片、近世陶磁器片が、出土した。

中西遺跡

14-10工区から11工区にかけての緩傾斜地に立地し、14-10工区では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴遺構を検出したほか、縄文時代後期の土器、中世輸入陶磁器を検出している。11工区



第15図 冷酒庵B遺跡遺構検出状況

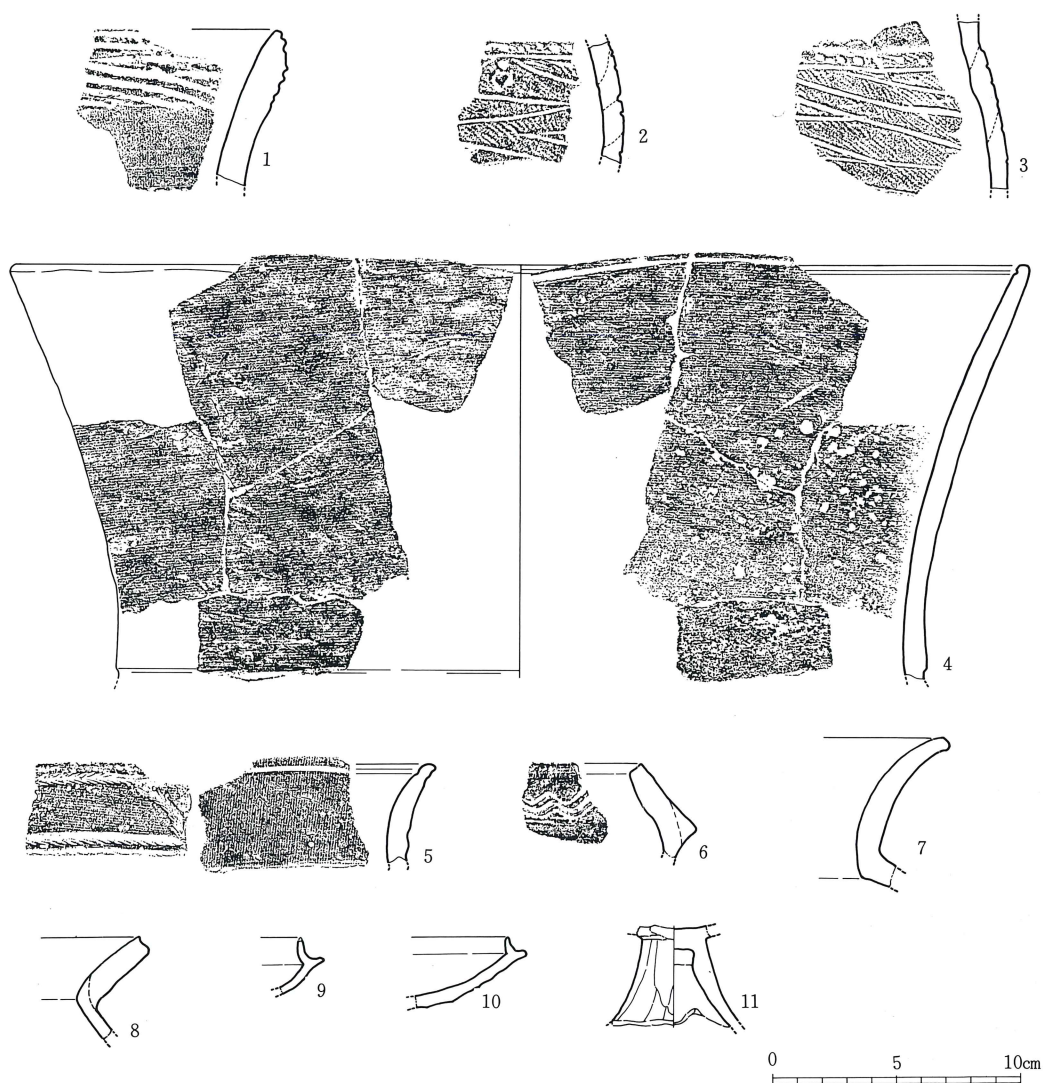
では遺構の検出はなかったが、須恵器片を検出している。

妙大寺A遺跡

14-4工区において弥生後期の土壌を一基検出している。遺跡は現在造酒工場下に広がると考えられる。

妙大寺B遺跡

工事終了後発見したもので14-11工区東側断面に土壌3基があり、15~16世紀の土師器杯・小皿等を多数採集した。遺跡は、14-11工区からその東側に向かって広がっていると考えられる。



第16図 小田遺跡群出土遺物実例図

以上のほか、鬼塚古墳に接する14—6工区を試掘したが、かつて小学校の建設で造成削平されており、なんら遺物・遺構は検出されなかった。

(3) 出土遺物

1～3は中西遺跡(14—10工区)で流れ込みの状況で出土した。1は、縄文後期北久根山式の時期の鉢口縁部。2・3は後期松木式期の鉢4・5は冷酒庵A遺跡出土の三万田式土器。

6～8は中西遺跡出土、6は弥生時代後期の複合口縁壺、7・8は同じく甕

9～11は冷酒庵B遺跡検出の古墳時代後期遺物。11は脚部外面にタテ方向にケズリを施す。

(4) 小 括

今回の詳細分布調査の結果、縄文後晩期の3遺跡(西田・冷酒庵A・中西)を確認するとともに各所で単独に打製石斧・黒曜石片を採集した。その地形と併せ考えれば後晩期の居住と生業の様子をうかがう資料となろう。

弥生時代中期から古墳時代後期にかけての遺構および遺物を多数確認し、6世紀に鬼塚古墳を築造するにいたる足どりとその前後の様相を確認するうえで興味深い遺跡群である。

今回の試掘では奈良～平安時代の資料を欠くが、鎌倉～近世にかけては多くの資料をえた。ことに15～16世紀に資料として冷酒庵Aの墓地と冷酒庵Bの柱穴群、妙大寺B遺跡が確認され、今後・地名・文献等の調査を行えば中世小田の具体像をより豊かに提出できると考える。

なお、以上の所見をもとに現地において協議した結果、西田・冷酒庵Bの両遺跡の工法変更不可能地区を本年度本調査、冷酒庵A、冷酒庵石棺東側地区(15—2)妙大寺(14—4)、中西(14—10)の削平部分を来年度本調査することとなった。



IV ま と め

昭和60年度大分県内遺跡詳細分布調査事業による分布調査では、約35ヶ所の工区で遺跡及び遺跡の存在が推定された。このうち試掘調査の概要で述べた5工区は、県教委で遺構確認調査を実施し、その他は事前協議による保存措置、工事中の立合い調査、市町村教委による発掘調査等によって対応した。

八面山東部工区は、犬丸川流域の平野部にあたり、地形的な条件や周辺の遺跡分布状況等からかなり規模の大きな遺跡の存在が推定された。しかし大部分が二次的な堆積土で、弥生～近世に至る土器類の検出はあったものの、遺構についてはほとんど確認されなかった。

深野遺跡は、試掘調査によって新たに発見された旧石器時代の遺跡で、遺物の出土状況から遺跡東端部に位置することが判明した。石器は、ホルンフェルス・安山岩を石材とするが、製品化された石器の少ないのが特徴といえる。

竜頭古墳は、八坂川流域の沖積地に位置する古墳で、町内では初めての古墳調査であった。当初は2基と見られていたが、1基はおそらく周辺にあった古墳石室材の集石と思われる。

調査した古墳は、現存状況からほとんど遺物の存在はないと思われたが、床面は比較的良好の状態に残り、須恵器等の出土で六世紀後半代に比定された。また石室の腰石や奥壁は、ほとんど加工の見られない板状の自然石をたてて並べており、奥壁も二枚からなるのが特徴的である。

高添遺跡は、大野川中流域の台地上に位置する遺跡で、今後の展開では弥生後期を中心とした大集落の存在が予想される。今回の調査区は遺跡のごく一部の範囲であったが、旧石器や縄文後期の住居跡も検出され、最近相次ぎ発見れた朝地町田村遺跡、三重町惣田遺跡、野津町内河野遺跡などと共に、大野川中流域における縄文後・晩期の住居跡及び集落形態を知る上で重要視される。

小田遺跡群は、伐株山西方の扇状地一帯で、縄文時代から近世に至る遺跡が各地で確認されている。また今回の調査区は、装飾古墳である鬼塚古墳が存在することや、中世小田氏の本貫地であることから注目された地域であったが、ほとんどが水田であったために遺物の散布状況等は不明であった。しかし試掘によって7つの地区で遺跡が確認され、ほとんどの遺跡で15～16世紀代の柱穴群や土塚墓群が検出された。また西田遺跡群が確認され、鬼塚古墳との関連を知る上に注目される。

以上、今年度は5工区で試掘調査を実施し、このうち竜頭古墳は調査の進展に伴って、地元から保存の要望が強まり、県耕地課の協力もあって若干の修復を行ない現状保存となった。高添遺跡は、今年度工区の一部を千歳村教育委員会が、小田遺跡群は玖珠町教育委員会が事業主体となって、記録保存のための発掘調査を行った。

大分県内遺跡詳細分布調査概報 5

1986年3月

発行 大分県教育委員会
印刷 日の丸印刷株式会社
